
LOVED

やかん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LOVED

【Nコード】

N6254Y

【作者名】

やかん

【あらすじ】

高校2年生の初夏。？林明奈は父の再婚によって母親と弟ができた。新しい家族には簡単に馴染めなくてイライラする日々を送っていた。なんてことはないきっかけで新しい母親と弟を受け入れようと決める。しかし、変わろうとした時には抱えた病気の進行が早まってしまい……。

現状

再婚するから。

父は朝そう言って会社へと出勤していった。母が死んでから16年、男手ひとつで育ててくれた父さんに文句をいうつもりはない。

「てか、父さんいつの間に・・・」

まあ、どうでもいいか。仕度を終え学校へ向かう。

父さんが再婚したら、学校を転校しなければいけないのか？ふと、そんな事が頭をよぎる。

「別にいいか、」

転校しても。大切な友人はいるけれど、2度と会えない訳ではないだろう。いつもは長い学校への道のりを大変だとは思わなかった。気がつくとも学校の前。無意識って怖い。

「おっす、？林」

ポン、と肩を叩かれる。振り返るとそこにいたのは

「おはよ、悠斗」

金髪碧眼という目立つ風貌をしたクラスメートの、駒野悠斗^{こまのゆうと}。中1の時から友人。

「聞いたか？今日、数学小テストあるんだとー」

くそくそ。ブツブツ呟く悠斗。ああ、勉強してないんだな。ドンマイ悠斗。

「余裕だよー。わたしは、だけど」

「あー、もうっ！！？林ム力つく！！」

「あら悠斗。数学教えてほしくないの？」

表情筋が明らかに緩んでいるな、わたし。しかし、仕方のないことだ。悠斗をからかうのは楽しいのだから。

「・・・教えて欲しいです（ニヤニヤしゃがって。チクシヨ
ー・・・！！）」

上目づかいで恨めしそうにわたしを見る悠斗。睨んでいるつもり

かもしれないが可愛いだけ。

「はい、このノート見れば8割は点取れるよ。色ペン使っていないところもちゃんと覚えてね」

「うー・・・さんきゅ」

喋りながら教室に向かうとすぐに着いてしまった。わたしの席は窓際の一番後ろ。悠斗は廊下側の一番後ろである。

「おはよー？林」「おはよう、？林」「はよー」

「おはよー」

クラスメートに挨拶を返す。悠斗以外とは深く関わろうとしないわたしを受け入れてくれるこのクラスが好き。

さて、4限目。数学の小テストである。

始まる直前、ちらりと悠斗の方を見る。割と落ち着いているようだ。あ、こっち向いた。声は出さず、口の動きで言葉を伝える。

「（が、ん、ば、れ）」

悠斗は音のないその言葉を受け取ると、笑って頷いた。

現状（後書き）

ジャンルとして恋愛をつけていますが、ちゃんと恋愛モノを書けるか不安です。
精一杯頑張ります。

迎え

数学の小テストも無事に終わり、放課後。

「また明日な」

「うん。部活頑張つて」

悠斗はサッカー部に所属している。レギュラーではあるが、いつ落とされるか分からないらしい。実力主義の部活だから仕方ない。

「さて、帰るか」

桜ヶ丘学園は部活に必ずしも所属しなければならないわけではない。家庭の事情等、正式な理由さえあれば帰宅部も許される。

学校の門から外へ出ると、見慣れない制服の男が立っていた。銀色の髪が目を引き。一瞬視線を向けたものの、すぐに興味が失せる。早く帰ろう。少し歩くスピードを上げる。

「あんた、？林明奈か？」

なんか、名前呼ばれた気がする。振り返れば、銀髪の男がすぐ後ろにいる。え、怖。足音しなかったぞ。

「誰？」

一応確認だ。知り合いかもしれない。わたしはどうでもいいと思つたことはすぐに忘れてしまうから。

「先に質問に答えろ」

なんだコイツ。

「？林明奈ですけど。で、貴方は誰？」

「榊侑斗。柚樹さんに頼まれて迎えに来ただけど、連絡貰つてないのか？」

悠斗と同じ名前。柚樹つて・・・父さんの名前だ。連絡？鞆から携帯を取り出し確認する。

『再婚相手の息子さんが学校まで迎えに来てくれるから。合流してね P・S 息子さんの名前は榊侑斗君だよ』

「そつという事は朝に言えよ・・・」

クソ親父！

「納得してくれたか？」

「ええ、まあ」

うん。なんか、そんな感じで一緒に高そうなレストランに行くよ。
もう訳が分からない。

迎え（後書き）

全体的に一話一話が短いです。

キョウダイ

「明奈、こちら榊遥香さん。父さんの再婚相手だよ」

「榊遥香です。よろしくね、明奈ちゃん」

声が上手く出ない。かすれた声で返事したくない。

とりあえず頷く。

その後もいろいろ話していたけど、頭に入ってこなかった。どうしてだろうか。再婚がイヤ？まさかね。

「苗字は榊にしようと思う。明奈、いいかな？」

自分の名前に反応する。苗字とか、どうでもいいじゃん。何でわたしに聞くの？

「父さんがそうしたいなら、それでいい」

「・・・そうか」

父さんはたぶん気づいた。わたしが機嫌悪いことに。

「キョウダイになるわけだし、明奈ちゃんと侑斗2人で話してみたら？」

遥香さんが提案する。キョウダイね・・・。

、侑斗君、のほうを見れば彼は下を見ていて。

彼の無表情に驚いた。肌の白さがその表情を引き立てている。

溜息をついて、わたしのほうを見ると少し面倒くさそうに

「外に出るか？」

と言った。

うん。なんか、そんな感じで一緒に外に出たよ。

なんか、もうヤダ。

「誕生日」

誕生日？

「俺が兄か、あんたが姉か」

「誕生日聞くて事は・・・同い年ってこと？」

「頭は悪くないみたいだ。そういうことだよ」

はい、上から目線！。なんだコイツ。

「12月3日」

「・・・1日違いで俺が弟だ」

わあ、お姉ちゃんだって！。

まじか。

キヨウダイ（後書き）

侑斗君のキャラが定まりません。どうしたものか・・・

報告

「来週から榊明奈になる」

「はぁ？おおおお前、けけけ結婚でもすすすんのか？」

いろいろ省いて悠斗に説明したら、案の定誤解した。本当に見えて飽きない。

「馬鹿ね、そんなわけないでしょ。父さんが再婚するの。なんで苗字を変えるかは知らないわ」

「なんだよ。そういうことか」

「うん、そういうこと」

「あー良かったあー」

「なんで悠斗が安心するの？」

「……友達だからナ！」

今の間は何だったのだろう。まあ、こういう間はたまにある。気にしないのが1番だ。

「そりゃ、どーも」

ふと時計を見れば、昼休みが終わる10分前になっていた。

「悠斗、わたし今日早退するから」

「おー、了解。あーちゃんには俺が伝えておくから」

あーちゃんというのはわたしたちのクラスの担任のあだ名である。本名は天宮蒼樹。26歳とまだ若い教師であるが授業は面白く、多くの生徒から慕われている。わたしも教師の中では彼が1番好きだ。お願い。早退することは伝えてあるから、帰ったってことだけ伝えておいて。じゃあ、また来週に」

「おう！またなー」

月に1度は必ず早退をするわたしは、その理由を悠斗に言ったことがない。聞かないでいてくれる悠斗の優しさに甘えてるのだ。

鞆を持ち、教室を出る。靴箱まで行けば、父さんが待っていた。

「ごめん、駒野と話し込んでた」

「大丈夫だよ。僕も着いたばかりだから。さ、車に乗って」
「うん」

学校を早退し、親に送ってもらった場所はわたしの大嫌いな病院。
自分の命の短さを認めざるを得ない場所にわたしは行くのだ。

通院

「また少し体温が下がっていますね」

主治医である柳川先生の一言に溜息をつきそうになる。

34・8度。人の体温としては低い。あたしの病は徐々に体温が低くなっていくというものである。原因は不明。母さんはこの病によつて、20歳で亡くなった。長く生きたほうだと、父さんは言っていた。遺伝的なもので、母は祖母から、わたしは母からこの病を受け継いでしまった。母さんを恨んだことがないとは言えないけれど、わたしは産んでくれたことに感謝している。弱った体に宿った命を捨てたりしなかった母さんを恨んでは罰があたるだろう。

「柳川先生、わたしはあとどれ位学校にいられますか？」

「このままの速度で進行が進めば、進級できるか分からない」

体温が34度を下回った時点で、入院することを約束させられている。残り0・8度の猶予はあまりにも短い。高校2年生になってから、体温が低下する速度が格段に上がった。わたしの命の火は急速に小さくなりはじめたのだ。

隣に座る父さんがそつとあたしの頭を撫でた。何も言わないのは、何を言つていいのかわからないからか。それとも、母さんを思いだしているのか。

「明奈ちゃん、今日は精密検査を受けていつてくれるかい？」

「分かりました」

問診が終わり、とりあえず待合室に戻る。

「父さん、家にいったん戻っていて。終わったら、連絡するから」
精密検査を受けるとなると、長くかかるだろう。待たせるのは、わたしが嫌だ。

「うん。ご飯作って待つてるから」

「あははっ、久しぶりの父さんのご飯楽しみだなあ」

「とびきりおいしいもの作るからね」

「うん」

バイバイ、手を振って父さんは家へと帰っていった。

これで気が楽になる。目をつぶって名前を呼ばれるのを待った。

「明奈さんか？」

名前を呼ばれるには早くないか？不思議に思っただけ目を開ければ、来週からわたしの弟になる榊侑斗がいた。どうして病院なんかにいるのだろう。

「こんにちわ、侑斗君。どうして病院に？」

「それはこっちのセリフだ」

一緒に食事をした後、病気の事を黙っていて欲しいと父さんに頼んだ。もしかしたら、遥香さんは知っているかもしれない。けど、少なくとも彼はわたしの病気を知らないはず。

「友達のお見舞い、かな。侑斗君は？」

知られたくないと思った。だから、嘘をついた。

「・・・知り合いの見舞い」

嘘つきなわたしだから分かる。彼は今、嘘をついた。わたしと同じ種類の嘘。

「明奈ちゃん、いいかな？」

わたしの思考を遮るように聞こえたのは、柳川先生の声。

「はい、今行きます。じゃあ侑斗君、またね」

「ああ」

詳しくは言わなかったし、詳しく聞かなかった。そして、わたしたちは嘘をつきあった。

どうして嘘をついたのかなんて、聞けない。聞かれて困るのはわたしなのだから。

通院（後書き）

文章中にある病は架空のものです。実際に存在するものとは一切関係ありません。

引越し（前書き）

文章中にある病は架空のものです。実際に存在するものとは一切関係ありません。

引越し

土曜日。今日、元の家から少し離れたところに引っ越した。新しい家族との生活が始まる。

「無事に引越しが終わってよかったよ」

「そうね。そうだ、お茶にしましょう。侑斗手伝って」

遥香さんが湯を沸かし、侑斗君がカップの用意をする。遥香さんを「母さん」と呼ぶ勇氣はまだない。

わたしと父さんは座って待っている。

「明奈、学校に少し近くなってよかったね」

「んー、うん。これから暑くなってくからね、助かるかな」

温度差はわたしの体には毒だから、日傘を差して、できるだけ日に当たらないように登校しなければいけない。距離が短くなるのはいいことだ。車で送ってくれると父さんは言うけれどそんな事したら、自分が惨めになるからと断った。弱いことを認めるのはイヤ。

わたしはいい意味で言っただもりだったけど、父さんは一瞬眉をひそめた。

「ねえ。わたしさ、新しい日傘欲しいんだ。今度一緒に買いに行こうよ」

笑っていてほしいから。悲しそうな顔を見たくないから。わたしは物に頼って誤魔化すの。

「うん、一緒に行こう。他に欲しい物はない？」

「ないよ。とりあえず、新しい日傘が欲しいの」

分かったよ、と言って父さんが笑った。

「お茶入れたわ。クッキーも出したの」

4つのカップがそれぞれの前に置かれた。2倍に増えたそれらに違和感を覚えた。早く慣れないといけないと思う自分と別に慣れなくてもいいじゃないかと思う自分がいる。

「良い香りだね。クッキーも美味しそうだ」

父さんが遥香さんに向かって笑う。ああ、変な感じがする。今までその笑顔はわたしと母さんのものだったから。・・・ただの独占欲だ。

ゆったりと時間が過ぎていく。話し声は絶えることがない。まあ、主に喋っているのは父さんと遥香さんだけだ。

「明奈ちゃんもクッキー食べてね」

「あ、はい」

愛想笑い。いい加減疲れる。クッキーにはナッツが入っている。わたしはナッツが苦手なのだ。食べないんじゃないかと、食べたくない。父さんはわたしの好き嫌いを知らない。知られないように、細心の注意をはらってきたから。好き嫌いなんていうわがままで父さんを困らしたくはない。

残っていた紅茶を一気に飲み干した。

「疲れたので部屋に戻ります。お茶、美味しかったです」

キッチンにカップを置き、自分に与えられた2階の部屋へと向かった。

父さんや遥香さんがどんな表情をしているか知らないふりをして、侑斗君の視線に気がつかないふりをして。

「息が詰まる」

部屋に入るなり、呟いた言葉は無意識に出たものだった。

この新しい生活にわたしは慣れることができるだろうか。先行きが不安でならない。

観察日記1（前書き）

サブタイトルに『観察日記』が付く場合、視点が侑斗になります。

文章中にある病や病状は架空のものです。実際に存在するものとは一切関係ありません。

観察日記 1

姉が荷物を片付けていく様子を横目で見ていた。一週間前、病院で嘘をついたことに何故か罪悪感を感じ、話しかけられないでいた。大きな荷物を持って歩く姉は、とても危なっかしい。

「明奈さん」

「なに？」

名前を呼べば、警戒した声で返事が返ってくる。4人での時間が増えるようになってから、姉は俺と母さんに対する壁を厚くした。「重そうだから、手伝う」

荷物を持ってみると、思っていた以上の重量だった。

「大丈夫よ。自分で運べるわ」

「作業効率を考えれば、俺が運んだほうが速い」

「侑斗君だって、まだ片付け残っているでしょ」

「もう終わった」

「・・・分かったわ。その荷物だけお願い」

部屋の前に置いという、そう言う姉は次の荷物を取りに行ってしまった。

俺との会話を続けるつもりはないらしい。

片付けがすべて終わり、お茶をすることになった。俺と母さんが準備をしている間、柚樹さんと日傘の話をしていた。柚樹さんと話している間はとても楽しそうだ。

母さんと柚樹さんが話している間、ずっと黙っていた。何かに耐えるように。

カップをギュッと握った後、不自然なくらいに自然に笑って感情の読めない声で言った。

「疲れたので部屋に戻ります。お茶、美味しかったです」

そして返事を待たず、部屋へと戻っていった。

「ごめんね、遥香さん。2人での生活が長かったから、なれないみ

「ただ」

姉が姿を消した廊下を見つめながら、柚樹さんが笑った。苦笑と言ったほうが正しいだろうか。

「大丈夫。初めましてって言い合ってから、まだそんなに経っていないんだから仕方ないよ。少しづつなれていけばいいわ」

ね、そうでしょ。カップの中を見つめながら母さんも笑った。

「柚樹さん、先週明奈さんと病院で会ったんですがどこが悪いんですか？」

本人に聞いてもきつと答えてくれないから、ずるいとは思うが聞いてしまった。柚樹さんは困ったように溜息をついて、ゆっくりと話した。そのとき横目で見た母さんの表情は少し苦しそうだ。病院へ向かう俺を見ると似た表情^{かお}。

「少しずつ、体温が低くなっていく原因不明の病なんだ。人間の体温は低くても35度台だよ。でも明奈はそれを下回り始めている」

「・・・治療法はないんですか？」

「残念ながらね。体温調節を上手にできないから、運動は控えさせてる。いろいろと予防策を考えて実行はしているけど、いまいち効果が認められないんだ」

「明奈さんだけがその病気に？」

「いいや、違うよ。この病気でわかっていることは遺伝的なものだから。明奈の母親と祖母がこの病気で亡くなっている。2人の症状から、明奈にはある一定の体温以下になったら、入院することを約束させているんだ」

「あとどれ位の間、自由に動き回れるんですか？」

「進級できるか分からないらしいけど、正確な時期を僕は知らないんだ。・・・ああ、どうしてって顔をしているね。明奈の主治医にね、聞いたことがあったんだけど、答えてくれなかったんだ。明奈が絶対に言うなって。言ったら、絶対にダメって言われたからって。患者の意志を1番に尊重する方だから、僕はもう聞かないことにしたんだ」

「信用なさっているんですね」

「どうか。僕は明奈が信用しているから信用しているだけだよ。頼りない父親だけど明奈の思いは尊重してやれるからね」

すべてを教えてくれたわけではなさそうだが、自分のことを話していない俺にはこれ以上追求はできない。

「そうですか・・・。あの、教えてくださいましてありがとうございます」

どういたしまして、柚樹さんはそう言って笑った。

柚樹さんは何も言わないが・・・たぶん俺の病氣のことを知っている。

もう治ったはずなのに、俺を苦しめ続ける病氣のことを。

観察日記1（後書き）

ますます侑斗君のキャラが定まらなくなっていく……。

頑張ります。

転校

引越しを終えた翌々日。

いつもどおりに登校すると、学年全体が騒がしいことに気がついた。いったい何があったのだろうか。

教室へ入ると悠斗がものすごい勢いでこちらへ向かってきた。

「？林聞いたか？」

「ちょ、悠斗近いから。バック、2歩バック。で、何？」

「だーかーらー、転校生のことを聞いたか聞いてんの」

「転校生がどうしたのよ」

「となりのクラスに来たんだよ。私立西東学園から」
しりつにしあずまがくえん

「は？お坊ちゃま学校からわざわざ？そんな馬鹿なことあるわけないじゃない」

西東学園はここから一駅向こうにある、金持ちのボンボンが通う有名な男子校だ。世間のことに疎いわたしでも知っている。

「馬鹿なことがあるからみんな騒いでるんだよ」

「で、その馬鹿の名前は？」

「榊侑斗。俺とおんなじ名前だったから覚えちゃった」

なんで。どうして。誰か説明して。わたしにわかるように今すぐ

！！

・・・落ち着けわたし。家がこの学校から近いんだ。転校してもおかしくはない、のか。

だったら一言くらい言えればいいのに。いや・・・そういえば、

「話しかけられるたびに嫌そうな顔したからな・・・」

言えなかったのかもしれないな。雰囲気的に。

一緒に生活していてイラツとくる態度をしてる割に性格自体は悪くないことが分かった。だからといってどうもしないけど。

いや・・・待てよ。同姓同名の別人っていう可能性もあるかな。

（認めてしまえばいいのに認められない。嫌な意地）

「もしかしてさ、その転校生って銀髪だった？」

「え？ああ、うん。そうだけど、何で知って「明奈さん」うわっ・・・！」

突然聞こえてきた声に悠斗が飛び上がった。わたしのほうへ近づいてきたからよけて背中を押すと、「痛っ」という声とゴンツという鈍い音が聞こえた。ご愁傷様。

「・・・侑斗君」

もう見てしまったから否定できない。隣のクラスに転校してきたのはわたしの弟になった榊侑斗だ。

「柚樹さんが今日の放課後開けておいて欲しいって言ってた」

侑斗君は大きな音をたてて倒れた悠斗に目もくれずわたしの姿を見つけると声を発した。

ああ、みんなの視線が刺さっている気がする。とりあえず、返事をしておくか・・・。

「・・・了解。あー、ありがとう。伝えてくれて」

「別に柚樹さんに頼まれたから伝えただけだ」

そつけない返事をするとうろたえて弟はこの場を離れた。

さつさと戻るくらいなら休み時間とかに来てくれればよかったの

に。クラスメートの視線と廊下からの視線で溶けてしまいそうだ。

人とそんなに関わらないから注目されるの慣れてない。

「転校生と知り合いなのか？」

「名前で呼ばれてたよね。なんで？」

「？林テメエ、よくも押しやがったな・・・！デコ打ったじゃねえか」

「・・・。ハハハハハ。」

「あはっ・・・」

笑っしかないね。どうしようかこの状況。質問攻めだ。

まったく、面倒な1日になりそうだ。

家に帰りたい・・・いや、どこか遠くへ行きたいな。家に帰っても仕方ないし。

5 時間目 体育

どういう訳か今日の体育は男女合同で、しかも2クラス合同。気分が最悪なのは弟のいるクラスと合同なせいだろう。

「？林、記録とつてくれるかー？」

種目は3kmの長距離走。もちろんわたしは見学。病気のことは体育教師の原先生も理解しているので、記録などをわたしにやらせる。「何もしないで居るよりは気が楽だろ？」ということらしい。確かにそうなので助かる。

「はい。・・・あの、同じクラスの人の名前は分かるんですけど」「記録言う時に名前も言ってるから大丈夫だ」・・・分かりました。お願いします」

原先生の特徴は人の言葉を遮って喋るところだ。

バインダーに挟まれた名簿を受け取り2クラス分に簡単に目を通した。2枚目の名簿の一番下に手書きで「榊侑斗」と書かれていることに気が付く。

西東学園から桜ヶ丘学園に来るなんて馬鹿なのだろうか。施設だって、勉強の内容だって西東学園のほうが良いはずなのに。

「意味分かんない」

「あ？？林、今何か言ったかー？」

「あ」に濁点つけるとか怖いからね・・・。

「・・・何も言ってますん」

「そうかー？あー、じゃあ記録頼むぞ」

「分かり「お前ら準備運動終わったなら早く並べー」・・・チツ」人の言葉を遮っているのはわざとなのか？わざとでもわざとじゃなくても止めてほしい。

「・・・・・・？」

ふと、視線を感じ後ろを見渡すが誰もこちらを見ていなかった。
気のせい・・・かな。

パンツ。

原先生の合図で長距離のタイム計測が始まった。

少なくとも10分は暇だ。日陰に座り込む。

「榊ー、見学するなら？林の手伝いしてやれ。ついでにクラスメートの名前覚えろ」

「分かりました」

「榊」という名前にわたしは無意識に原先生の視線を追った。視線の先には、弟がいた。

つまり、弟は体育を見学していて、わたしと一緒に記録をとる。

まじか。

5 時間目 体育（後書き）

誤字を発見した為修正しました。

観察日記2（前書き）

今回は長めです。

観察日記2

「今日の放課後開けておいて欲しいって、明奈に伝えてくれる？」
「……は？」

朝、明奈さんが登校した後に携帯で連絡すればいいのに柚樹さんは俺に伝言を頼んだ。

「じゃあ、よろしく。ちゃんと伝えてね」

それだけを言って笑顔で出社していった。

「優しい顔して実はSだろ。ふざけんな」

なんて言えるわけもなく俺は誰に言うでもなく「分かりました」と呟いた。

予想は俺を裏切らない。姉は思っていたよりは嫌そうな顔をしながら、
「どうしてここにいるんだ」という心の声が伝わってきた。

俺の声に驚いて飛び退いた生徒を助けず、無表情に追い討ちをかけた姉の姿には少し焦った。

姉にも、俺の声に驚いた生徒にも、いろいろと申し訳なくて俺は用件だけを伝えて、すぐに教室へと戻った。

転校初日。1時間目は生物、3時間目は理数数学、4時間目は地理、5時間目は体育。6時間目は国語。2時間目は何だったか。

一番記憶に残ったのは5時間目の体育だ。姉のいるクラスと合同でしかも男女合同。姉の嫌そうな顔が容易に思い出せる。あと、少しだけ開いてくれた心もすぐに思い出せる。

5時間目、体育。

諸事情により体育は見学することになっている俺は他の人達が走っていく姿を見てなんとも言えない気持ちでいた。

「榊、見学するなら？林の手伝いしてやれ。ついでにクラスメートの名前覚えろ」

更にその気持ちを下げさせる言葉に溜息をつきそうになった。我慢だ……。

「分かりました」

呆然とした表情の姉の元へ行き、「よろしくお願いします」と言っ
て隣へ座った。

沈黙が続く。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………ねえ」

沈黙を破ったのは姉だった。

「何か？」

「どうして体育を見学するの？」

「柚樹さんから聞いてないのか？」

柚樹さんが話していないことを知っているがあえて、聞いてみた。

「父さんに？……聞いてないわ」

首を小さく傾げた。少し眉を寄せて考えるような表情をする。

「俺、小さい頃心臓の病気だったんだ。手術して良くなった。けど、

「……………」

「……………」

姉は俺の方を見て、話をちゃんと聞いてくれていた。少し、意外だ。

「運動は禁止されてる。治ったはずなのに、おかしいだろ？」

体育を見学する理由だけを言うつもりが自虐的な言葉を言ってしまった。どうしてだろう。

「……言いづらいことだったでしょ。教えてくれてありがとう」

どうでもいいと言われると思ってた。何も言わなくても、顔にどうでもいいという感情が浮かぶと思っていた。だが、姉は話を聞いている間も聞き終わった後も真剣だった。

「いや、別に……どうして、「そろそろ先頭が戻ってくるぞー」……」

「はい」

どうして見学しているんだ。その間は原先生によって遮られた。柚樹さんからは教えてもらったが、本人に教えてもらいたいと思った。でも、今は話をしている暇はないらしい。

姉はゆっくりと立ち上がると原先生の隣に立ち記録を取る準備を始めた。

俺も自分の役割を果たさなければ。まずは、クラスメートの顔と名前を覚えようか。

「一番手は駒野だー。9分58」

見覚えのある金髪。ああ、今朝姉に背中を押されていた人だ。運動神経よかったのか……。

「お疲れ様、悠斗」

「おう……うー、疲れたあー」

駒野はそのままバタリと倒れ込んだ。

「田中ー。5分5」

「田中ってどっちの田中です？」

「弟のほうだ」

田中と呼ばれた男子生徒は双子らしい。

後ろから同じ顔が向かってきている。先にゴールしたほうの田中も後ろの田中も無表情だ。

「怖い……なんだこの威圧感……」

本音が出てしまった。姉はそれが聞こえていたようで、俺の方を見て笑った。たぶん無意識。

「ふふつ。なにそれ」

「同じ顔が後ろからってシニールだと思う」

「だよねえ……うあ」

普通に話していることに気がついた姉は気まずそうに視線を前へ戻した。

「次も田中。5分20」

「はい……えと、田中君は弟のほうが侑斗君と同じクラスよ」

「なるほど。区別できるように努力します」

「制服着てる時は違うコーディネートだから分かりやすいと思うわへえ。あとで見てるか」

放課後。家に帰ろうと廊下へ出ると、姉が俺を待っていた。

「……一緒に帰らない？」

「……………」

なんて返したらいいか分からず俺は2回頷いた。

2人で歩いている間沈黙が続いたが、今回も姉がそれを破った。

「……今のところわたしは遥香さんと侑斗君を受け入れるつもりはないわ。だって、父さんと2人で今まで過ごしてきたから。でも、少しずつでいいなら受け入れていきたい。と思う、よ」

「……………ありがとう。明奈さん」

「名前、呼び捨てでいい。わたしが姉っていつてもたいして変わらないし。侑斗君、さん付けして呼ぶ割にそれ以外は普通に話してる」

受け入れようとしてくれている姉。

俺はどう答えていくべきなのだろう。

「面倒だったから助かる」

「面倒って何よ」

俺に向けられた笑顔。

どうしてそんなにきれいに笑えるんだろう。

「面倒っていうのは、煩わしいってことだろ」

「意味を聞いてるわけじゃないわ」

この人に笑っていてほしい。

俺はその時本当にそう思ったんだ。

観察日記2（後書き）

たぶんですが、次話で少し時間がとびます。
ここまでは初夏をイメージして書いていましたが、夏本番になると
思います。

アイス

夏。

湿度も室温ともに高く、汗でまとわりつく髪の毛が鬱陶しい季節。

とは言っても、その暑さはわたしには関係ない。温度調節をしつかりとした部屋の中でくつろいでいるのだから。

暑いのは体によくない。

「侑斗君、アイス取って」

「自分で取れよ……ああ、はいはい。取るからそんな目で見んな」

呆れ顔の侑斗君はソファから立ち上がると棒アイスを冷凍庫から取り出して、わたしに投げつけた。

「ねえ、半分個しよ」

「は？」

「一個も食べたからお腹冷える……」

「……………」

だったら食うなよという侑斗君の心の声が聞こえてくるけど気にしない。

「……………」

根負けしなければ侑斗君はこういうわがママを聞いてくれる、はず。

「はあ……。分かったよ。どうやって半分にするんだ？」

わたしの勝ち。わがママを聞いてもらえる。

「わたしが先に食べて、侑斗君が後から食べる。という訳でいただきます」

「は？え、いや。ちょ、待て明奈。それは」

「ふおえっえあい？（それってなに？）」

「何でもねえよ……」

口の中にアイスが入ってたから上手く喋れなかったけど理解してもらえた。

順調に半分を食べ、溶けて流れた部分を手ですくってから侑斗君に渡す。

「食べるのは構わないけど、棒アイスじゃなくてカップにしてくれね？」

「えー」

「カップアイス嫌いなのか？」

「全然そんな事ない。別にいいよ。次からカップにする」

「いいならいいって最初から言ってくれよ……」

「善処するわね」

わたしの言葉に侑斗君は溜息をつき、「まったく」と言いつつ残り半分のアイスを食べ始めた。

少しずついいから受け入れようと思ったら、それは案外簡単にできた。侑斗君と遥香さんが優しすぎて、壁を厚くして2人から逃げていた自分が恥ずかしくなったからかもしれない。

ただ、遥香さんを『母さん』とは呼べそうにない。と言うよりも、『母さん』と呼ぶ必要性を全く感じないのだ。

わたしはまだ知らない。この時から芽生え始めた愛しくも悲しい感情が、自分の中にあることを。

とうの昔に覚悟したはずの死に恐れるなんて、そんなのありえないと思ってた。

アイスみたいに少しの温度の変化で溶けてしまっほどわたしの心は脆くない筈だったから。

遺書 1枚目

遺書

？林 明奈

遺書といっても遺産がどうかじゃなくて、死人から生きている人への最後のメッセージです。

読まなくても、何の問題もないです。書いておいて何ですが、読まないでほしいと少し思っています。

死んだ人間のことなんか忘れて欲しいと思っているのだけど、忘れて欲しくないという思いがあるのです。ごめんなさい。

父さんへ

まず、親不孝な子供でごめんなさい。

たくさんのお愛をありがとう。苦しい時、ただ隣にいてくれるだけでわたしは救われました。来世なんて信じていないけど、もし人間として再び生まれることができたなら次もあなたの子供になりたい。そしたら、たくさん親孝行するから。

さようなら。どうか、幸せに生きてください。

遥香さんへ

最後まで、『母さん』と呼べなくてごめんなさい。『母さん』と呼ばなくてもいいと思っていました。理由は自分でも分からないままです。でも、たぶん呼び方なんて関係なかったんだと思います。

一緒に過ごせて良かったです。遥香さんもそう思ってくれましたか。思ってくれていたら嬉しいです。

父さんをよろしく願います。

父さんは優しく強い人だけど、支えてくれる人が必要です。

わたしはもうここにはいられないから。あなたの愛を信じているから。

だから、父さんをよろしく願います。

クッキー

「明奈ちゃん。一緒にクッキー作らない？」

始まりは、遥香さんの一言。

「はあ」

曖昧な返事をしたのが間違いだったのかもしれない。

でも、この出来事がなければわたしは気がつけなかっただろう。

「柚樹さんの好きな種類を作ろうと思うのだけど、いい？」

「おっけーです」

早速材料を冷蔵庫から取り出し調理を始める遥香さん。

父さんの好きな種類って……どれだ？基本的になんでも「おいしい」「この味好きだなあ」と言っただけ食べるから判断しにくい。……

遥香さんは何を作る気なのだろう。

出ている材料を見てみる。

もしかして……。

「あの、遥香さん。もしかしてナッツ入りのクッキー作る気ですか？」

「ええ、そうよ」

え、笑顔で返された……。

というか、父さんナッツ好きなのかな？

「父さんナッツ好きなんですか？」

「好きって言うたわよ？初めてデートした時にナッツクッキー持った行ったらとても喜んでくれたわ。これ好きなんだって」

「……そう、ですか」

「どうかしたの？」

「いえ、なんでもありません。とびきり美味しいクッキーを作りましたよね」

「ええ。もちろん」

父さんといるときに、ナッツを食べないといけないときはなかった。だから父さんがナッツ好きなんて知らなかった。嫌いなものを隠すために、父さんの好きなものを知らないでいたなんて……。

本当に、馬鹿。

ナッツを見つめていると、なんだか悲しくなってきた。

「よし。混ぜ終わったわ。少し冷蔵庫に入れて休ませましょうか。

……明奈ちゃん？」

「あ、すいません。ブーツとしてました」

「そんなことはいいのよ。どうしたの？」

心配そうにわたしの顔を見つめる遥香さん。
なんで？

「泣いてるじゃない」

「え……？」

遥香さんの言葉に驚き、そつと頬に触れる。
どうして気が付かなかったのか分からない。
わたしは泣いていた。

「どう、して……？」

どうして涙なんが出るの？

涙の理由

一度流れでた涙は簡単には止まらず、結局遥香さんにあやしてもらうことになってしまった。「大丈夫」と繰り返し言われ、わたしはそれに甘えた。恥ずかしい、なんて思う間もなかった。

人前でこんなに泣いたのは久しぶりな気がする。

幼稚園のときだって、泣いて先生を困らせるなんてしなかったのに。

「……、ごめんなさい。服を濡らしてしまいました……」

「いいのよ。気にしないで。大丈夫だから」

赤く腫れているだろっ目に遥香さんは水で濡らしたタオルをのせてくれた。

クッキーは私が作っておくから部屋で休んでいて。そう言われたわたしは素直に部屋に戻った。

タオルを目にのせたままベットに仰向けに寝転がり、お腹の上で手を組み合わせた。

どうして、泣いていたのか。

自分でもよく分からない。

「泣いてるのに気が付かないとか……意味分かんない」

遥香さんに指摘されるまで、自分が泣いていることに全く気が付かなかった。

ねえ、どうして？

「……だれか、おしえて」

父さんの好きなもの知らないってことが悲しかったから？

遥香さんが父さんの好きなものを知っていたから？

コンコン。

思考を遮るようにして、ノックが聞こえた。「どうぞ」と答えれば、ゆっくりと扉が開き誰かが足を踏み入れる音が聞こえた。

「明奈……?」

侑斗君の声。

「何?」

起き上がろうとすると、いつの間にか近づいていたらしい侑斗君に頭を抑えられてしまった。起き上がれない……。

「そのまま、いいから」

「ごめん……ありがとう侑斗君」

赤く腫れた目を見られるよりは気が楽だ。侑斗君の行動に助けられた。

「何があつたんだ?」

「……………」

「話したくないなら、別にいい」

「話したくないわけじゃ、ないわ……わたしにも何があつたか、よく分からないの」

クッキーを作ることになったこと。

ナッツが嫌いなこと。

父さんがナッツを好きだったこと。

自分がどうして泣いていたか分からないこと。

鼻声でゆつくりと話した。侑斗君は相槌を打ちながら最後まで話を聞いてくれた。

「人の気持ちなんて、他人には分からない。けど、たぶん明奈は寂しかったんじゃないか」

「寂しい?」

「今までずっと柚樹さんと2人だっただろ。前触れもなく家族が増えて、しかも自分のほうが長く一緒にいたのに知らないことがあった。悲しいとか、寂しいとか感じるものがあっても仕方ないだろ」

「侑斗君も、そうだった? 遥香さんと2人だったのに、父さんとわたしがそこに入り込んで、知らないこととかがあるって分かって、悲しかった?」

「どうだろうな。俺は、母さんが笑ってればそれで良かったからな。」

再婚で聞いて驚いたけど、柚樹さん良い人だから安心した。俺の父さん最低な奴だったから」

互いに似た境遇であつたからか、話を聞いたり話したりする中で理解し合える部分が多かつた。

「話、聞いてくれてありがとう。助かりました」

タオルを目の上から外し、ゆっくりと起き上がってわたしは侑斗君にお礼を言つた。

「どういたしまして。もう大丈夫だな」

「うん」

侑斗君が出ていった扉をじつと見つめている中で、わたしは胸が熱くなるのを感じた。

もっと一緒にいたい。

もっと話していたい。

もっと……。

こんな感情わたしは知らない。

この感情の名前は、なに？

日傘（前書き）

本編から少し離れてます。

主人公と父親の日常を書いてみました。

この話は読まなくてもストーリーの進行上問題ないです。

日傘

「明奈、明日一緒に買い物行こう?」
「うん」

夏休み2週間前の日曜。天気もよく絶好の買い物日和だ。
父さんと2人つきりで出かけられるの、嬉しい。

「何がいいとか僕にはよく分からないけど、一緒に見て回っていいかい?」

「ぜひお願いします。ふふつ。ね、行こつ、父さん」
自分のテンションが上がるのを抑えられない。
久しぶりの父さんとの買い物。楽しまなくては。

「水色とピンクは持っているから他の色がいいな」
白色の日傘をクルクルと回しつつ、父さんに話しかける。

「んー……明奈は白い服をよく着ているから、黒とか紺でもいいんじゃないかな」

「そう?じゃあ……これとか?」

白色の日傘をたたみ、黒色の日傘を手取る。

「開いてみたら?」

「ん。………どう?」

開いてみると、黒一色とシンプルなのが模様が細かく刺繍されておりとてもきれいだった。

「うん。今日の服装にもあっているし、いいと思うよ。いつもとは少し違って新鮮な感じ」

「じゃあ、これにしようかな。刺繍もきれいだし」

幸せな時間を家族と^{とっさん}

日傘（後書き）

次から話をどんどん進めたいと思います。

時間がかかるかもしれませんが、頑張ります。

夏休み前

「もう少しで夏休みですが、気を引き締めて授業に集中してくださいね」

あーちゃんの一言にクラス全体が「えー」という声を上げた。冷房の効いた室内とはいえ、体はダルイ。もう少しで夏休みということもあって、みんなダラダラとしている。

「？林、英語のノート写させて」

「夏休み前から宿題写そうなんていい度胸してるじゃない、悠斗」
「だって……イギリスじゃこんなに面倒な英語話さねえよ」

悠斗は小学校6年生までは、母親の実家があるイギリスに居たため英語は話せる。だけど、日本で地方ごとに方言があるようにその地域独特の英語だから苦労しているのだ。

「日本に来て、4年近く経ってるのにまだそんなこと言っているの？」

「だって……」

下を向いてしまう悠斗。

「分かったわよ。ノートは貸すわ。ちゃんと中身も確認しなさいよ」
頭を英語のノートでポンと叩くと、キラキラとした笑顔でこちらを見た。

「うおおおお！ありがと高林！！」

「どういたしまして」

「？林さん」

放課後、一緒に帰るため侑斗君を待っていると、あーちゃんがわたしの名前を呼んだ。

「あーちゃん？」

「良かった、まだ帰ってなかったんですね。少しお話があるのです

「がいいですか？」

「お話、か。たぶん病氣のことだよなあ……。」

「はい。大丈夫です」

「……別に1人で帰ってもいいよね。侑斗君と帰るのは今日は諦めよう。」

「単刀直入に聞きますね。前回聞いたときから1ヶ月経ちましたが、病氣の進行はどうですか？」

担任として、問題^{たかはやしあきな}はどうかしないといけないんだろうな。

「……………そろそろ、学校に来るのが難しくなるかもしれません。」

体調は、むしろ良い方なんですが、体温は下がるばかりです」

「病院の先生は何と仰っているのですか？」

「夏休み明けは学校に行けないだろう、と」

自分のことなのに、どうしてこんなにも冷静に喋られるのだろう。いつもそうだ。学校にはずっと行きたい。勉強することは嫌いじゃないから。なのに、学校に居られる期間が短くなったことを報告するとき、こんなにも淡々と話す。

「そう、ですか……………」

眉が寄って、怒っているみたいな顔をするあーちゃん。何故？

「体育祭と文化祭は、体調が良ければ許可を先生に頂いて来たいんですが、いいですか？」

父さんに聞いておくように言われていたことを聞く。別に、わたしが体育祭や文化祭に参加したいと言いつ出したわけではない。……参加したくないわけじゃ、ないのだけど。

「はい。もちろんです」

眉からシワがなくなつて、笑顔になる。ころころと変わる表情にどんな意味があるのだろう。

観察日記3

「講堂に行くので整列して下さい」

「……めんどくせえ」

講堂で行われるのは、前の学校では理事長の話が長く、面倒でしかなかった終業式。

「夏休みだからといって気を緩めて生活しないようにしてください。また、事故等に巻き込まれないよう、十分に気をつけましょう。えー、はい。校長の話を終わります」

黒髪に白髪の混じり始めた校長が早々に壇上を降りようとする。随分と適当な人だ。

「校長先生！もう少しお話いただかないと……」

「まあまあ。生活指導の先生やらが話すでしょう。同じようなことを何度も言われたら、生徒も飽きてしまいますよ」

若い教頭が校長を止めるが、生徒から支持される理由が伺える発言をして壇上を降りきってしまう。

校長の話の流れからか、他の教師の話も短く終業式は呆気無く終わった。

「超楽じゃねえか」

そう呟くと、出席番号が後ろの田中（弟）に「何が？」と聞かれた。小さい声で言ったはずなんだが、聞こえていたのか。

「終業式つてもっと話が長いもんだと思ってたからさ」

「この学校は教師の話が短いんだ。校長が面倒くさがりだからな。周りもなんとなく短くしないといけない雰囲気になってる」

田中は無表情に喋る。

「前の学校は校長、っていうか理事長の話が長かったから余計短く

感じた」

「私立西東学園、だっけ？」

あの金持ちばかりの、と付け加える田中。別に金持ちじゃない奴もいるぞ。俺とか。

「ああ。西東は堅っ苦しかったから桜ヶ丘に来て良かったよ」

「へえ。なんかそれ、嫌味に聞こえるな。西東に行けなかった奴がらしたら癪に障るだろうよ」

無表情だから、感情が読めない。何を思っ言葉を発しているのか。

「悪い」

「別に謝ってほしいわけじゃないんだけど。まあいいや」

「いいのか？」

「うん。嫌味には聞こえたけど、柗はわざわざ嫌味を言う奴に見えないから。無意識にでた言葉はある意味、嘘がなくていい」

「田中ってよく分からない奴だな」

「良い奴の間違えだろ」

「……そうだな」

「あ、兄だ」

教室の手前で田中（弟）が田中（兄）を発見し指さした。

「侑斗君、朝ぶりね」

「そうだな」

背の高い田中（兄）に隠れて見えなかったようで、明奈も彼の隣にいた。身体を少し傾けてこちらに手を振る。

「朝ぶりだな弟」

「そうだな兄」

相変わらずの無表情で2人は挨拶を交わした。終業式だけあって、校則通りの格好をしているためどっちがどっちかよく分からない。とりあえず、俺の隣にいるのが弟で明奈の隣にいるのが兄か。

「ふふっ。名前で呼び合えばいいのに、兄、弟って」

明奈は手を口に当てて、こらえるようにして笑った。

「？林、笑うな」「笑うな、？林」

「微妙なシンクロね。どうせなら統一してよ」

「微妙とか言うな」

無表情で同じように突っ込む姿に、俺も吹き出してしまった。

姉弟で大爆笑し、双子の兄弟に呆れられてしまった。

タイムリミット

明奈の命の時間制限にも気が付かず笑っていたこのときが一番幸せだったのかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6254y/>

LOVED

2012年1月10日16時50分発行